

娘に語る
祖国

つかこうへい

つかこうへい

蘇俄五城学院图书馆
祖国語
書章

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(〒112-11)

光文社出版局

娘に語る祖国

1990年10月30日 初版1刷発行

1991年4月15日 11刷発行

定価850円

(本体825円)

著 者 つ か こ う へ い

発 行 者 大 坪 昌 夫

印 刷 者 盛 庄 吉

東京都文京区水道2-4-26

慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2
振替 東京6-115347

株式会社 光 文 社
電話 東京(3942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(複本製本)

© Kōhei Tsuka 1990

ISBN4-334-05178-2

Printed in Japan

『娘に語る祖国』

目次

親より先に死んではいけません 7

おまえとママだけは守る 12

パパは韓国人です 19

ペンネームの由来 24

パパは卑しい子どもでした 29

人を差別できる快感 34

パパとママの姓が違う理由^{わけ} 37

おまえを日本国籍にした日 43

祖国を探す旅 48

パパはもう逃げません 62

恥のない人間はクズです 70

おまえはパパを誇りに思ってくれるか 83

望郷の念やみがたく、 92

明日はきっといいことがある 104

パパが韓国語を覚えなかった理由 110

パパは甘えないで生きてきた 119

生活文化的にはパパは日本人 126

傷つく女になりなさい 139

目の前の人を信じなさい

146

人間の残酷さと生命力を描くのがパパの役目です

153

人の心の暖かさは変わりません

162

みな子よ、祖国とはおまえの美しさのことです

171

装訂 宇野 亜喜良

親より先に死んではいけません

かわいいおまえが、もう四つになりました。

やはり女の子ですね。パパがママとソファアにすわり、仲良く話をしていると、口をとがらせ、

「ママと話しちゃダメ」

と言って、二人のなかに割って入ってきます。

そして、おまえは、

「大きくなったら、パパと結婚するんだ」といいます。

ママが、

「パパはママと結婚してるから、みな子ちゃんとはできないのよ」

「ほんとう、パパ？ ワーン」

おまえはパパにしがみつき、大声でオイオイ泣きます。パパはもうびっくりして、おろおろするばかりです。

ママが、意地悪く聞きます。

「パパ、幸せ？」

「うん、幸せ」

パパは、ほんとうに幸せです。だけどおまえの嬉しそうな顔を見るたびに、
「こんな親で申しわけないなあ」

という気持ちになります。

やはり女の子は、基本的にはお嫁に貰われていくものですし、パパの存在のせいで、おまえの人生に支障をきたすことがないようにと願っています。

パパは、週刊誌などでスキャンダルの多い人間なので、将来そんな週刊誌のきれっぱしを、おまえの旦那さんになる人や、その家族の人たちに読まれたらどうしよう

かと、心配になります。

別に、パパは世間に顔向けできないことをしてきたわけではありませんが、半分芸能人みたいな自分自身がイヤなのです。

おまえは、パパがこの世の中で得た唯一の真理であり、無垢なるものです。

そんなおまえに、パパは一つだけ言っておきます。

おおよそ人の子として生まれた者が、この世の中でなしてはならないことが、一つだけあります。それは、親より先に死んではいけないということです。

これだけです。

おまえが生まれた日は、昭和六十年十二月十四日です。

広尾の日赤病院の新生児室のガラス越しに初めておまえを見たとき、おまえは手足を伸ばし、大あくびをしていました。それが、パパはとても頼もしかったです。

抱きあげると、おまえはまるで雲のように軽く、顔を近づけると甘いミルクの香りがしました。

「丈夫な子ですよ」

と、雨森先生が声をかけてくれました。

「ありがとうございます」

パパは、腰がぬけるほど嬉しかったです。

ほんと、前の晩からずっと苦しかったですから。

おまえには、臨月で亡くなったお姉ちゃんがあります。

顔は、おまえそっくりでした。

その時、パパはママに付き添ってあげられませんでした。

パパは、こんな見栄っぱりな性格ですから、子どもが生まれるなんてことは、テレくさくて黙っていました。だから、事情を知らない友人から、「お酒を飲みに行こう」とか、「大事な話がある」なんて言われたら、断われなかったのです。

ママは、そんなときにまで出かけてしまったパパのことをちっとも責めませんでした。が、とてもつらかったことと思います。

おまえのときもまた、Kさんという人が別居している奥さんのことで相談にのってほしいと、電話をしてきました。

こっちはそれどころじゃないんだと、何度も断わろうとしましたが、パパにはできませんでした。

ママは今度も、「行ってあげなさいよ」と言ってくれましたが、Kさんの家に向かうタクシーの中で、パパはもう泣き出したい気持ちでした。

「どうか、おまえとママをお守りください」

と、パパは初めて神様に祈りました。

次の朝、元気なおまえを見たときは、ほんとうにうれしかったです。

でも、おまえが女の子のせいかな、パパは人生に対して大きな人質をとられたような気持ちでした。

また、もういままでのようなフラフラした気持ちでいられないかと思うと、ちよっぴりさみしい気もしました。

おまえとママだけは守る

おまえが病院から家に戻ってくる車の中で、パパはママに、

「この子が大きくなり、やがて愛する人と出会い、嫁ぐ日までお預かりしている。お育てさせてもらっている。そういうふうを考えてくれ。なんにしても、溺愛はよくない」

と、宣言しました。

そのとき、パパのことを、なんてりっぱな男の人だろうって顔をしてうなずいていたママが、先日、デパートでおまえのためにルイ・ヴィトンの小さなかわいらしいバッグを買ってきました。

パパは、

「こんなもんを小さいうちから持たせといて、もし安月給取りのサラリーマンと一緒にになったら、どうするんだ。はなもちならない女になるぞ。すぐ返してこい」

と怒鳴りつけました。

と、ママは、

「そういうときにひがまなくていいように、子どものうちから持たせておくんですよ」

と、一笑にふします。

なるほど、一理あると思いましたが。でも、なんだかだまされているような、釈然としない気持ちでした……。

そして今度は、ケリーバッグを買ってやるのだと言います。

パパが、値段を聞いてあきれて、

「そんな六十万円も七十万円もするものが子どもに必要なのかよ。ほんとに自分が持ちたいんじゃないのか」

「なんてこと言うの」

「おまえがほしいんなら、ほしって言ったらどうだ」

「あたしがほしと言ったら、あなたは買ってくれますか」

「いや、おまえはもうオレの嫁さんになったんだから、あんなもん要らんだろうが」
「まっ、どういうことでしょう」

ママの言うには、いまの時代は食欲、性欲のほかに、買い物欲とかファッション欲があり、それが適当に満たされないと、女の子の教育上よくないということです。

ママがパパのお嫁さんになったのは二十歳のときで、メエメエ泣くばかりの、弱虫のお嬢さんでした。

パパとデートをするときも、ジュースについているさくらんぼのタネを吐きだすのが恥ずかしくて、ゴクリと飲みこみ、その音がパパに聞こえたんじゃないかと思うと、一晩中眠れなかったというエピソードのある人です。

結婚してからも、パパと目をあわせるのが恥ずかしくて、半年ぐらいはうつむいてご飯を食べていました。

それが、おまえができてからというもの、どんどん強くなり、おまえを叱るときな